

# 序

本書はその題名が示すように、研修医、臨床医全般、開業医、薬剤師を対象に、非ステロイド性抗炎症薬（nonsteroidal anti-inflammatory drugs : NSAIDs）のすべてがわかるハンドブックです。第1部：総論、第2部：各疾患別NSAIDsの使い方、第3部：薬剤編と3部に分かれている。第1部でNSAIDsの基礎知識を、第2部では膠原病、整形外科領域、炎症、疼痛性疾患、その他の領域に分け、NSAIDsの具体的な使い方を、第3部では、アスピリンを含む各NSAIDsの特徴と使用の際の注意点などを各分野の第一人者の先生方に丁寧に解説していただいた。

NSAIDsは発熱、発痛などを緩和し、多くの患者さんのQOLを向上させる薬剤である。その作用機序は1971年Vaneにより「抗炎症＝プロスタグランジンの合成阻害」であることが証明された。以前はステロイドと比較したせいか「NSAIDsは副作用が少ない」とのイメージがあったが、今日ではNSAIDsの副作用は多岐にわたり、また重篤なものも存在することが知られている。1991年のCOX-2の発見、その後のCOX-2阻害薬の開発、心血管系副作用の問題などが話題となり、米国食品医薬品局（FDA）はすべてのNSAIDsの添付文書への心血管系副作用の警告を義務づけた。しかしながら、NSAIDsは最も頻用される重要な薬剤の一つであることに変わりない。

アンケートなどで「NSAIDsの使用法や使い分けが難しい」という研修医の意見をよく耳にする。NSAIDsはその適応も広く、数多くの重大な副作用も知られ、使用には細心の注意が必要とされている。類似薬も多く、症状に応じた適切な選択、使い分けが大切である。

本書は実用的であり、なおかつ、「なぜこの処方なのか？」が納得でき、一通り読めばNSAIDsの処方のコツと基本がすべて学べる書籍となっている。本書が一人でも多くの先生方のお役にたてば、編者をはじめとする執筆者全員の無上の喜びである。

2010年2月

佐野 統